孫たちの経済的可能性

Economic Possibilities for our Grandchildren (1930)

ジョン・メイナード・ケインズ [*]
訳：山形浩生 [†]

2015 年 8 月 17 日

概要

いま（第一次大戦後で大恐慌時代）は経済的にはひどい状況にある。でも長期的に見れば、経済は 17 世紀末から急激な成長をとげてきた。これは、急激な技術革新と、資産/資本の蓄積があったから可能になった。イギリスの資本は 3.25 パーセント成長を続けている。これがもっと続けば、経済はまちがいなくずっと豊かになる。機械失業などは起こるが一時的なものだ。すると、人類の経済問題は基本的に解決してしまう。

そのとき、人間は何をするだろうか。いまは勤勉がよいこととされているし、多くの人は暇と自由に耐えられないだろう。少なくなった仕事を広く薄く共有して何とか仕事を続けようとするかもしれない。一方で、働く必要がなくなれば道徳もかわり、これまで金持ちや高利貸しを肯定してきた価値観が否定される。本当の生き方をわきまえた人が、余暇を十分に使えるようになる。これまでの金持ちや高利貸し翼賛は、資本蓄積を実現するための方便。それが十分に終われば、尊敬されるのは本当にいまを充実して生きられる人物だ。ただし、それが実現するのは百年以上先。そのうえで、いまのうちから人生を楽しむ準備をしておいてはいかが？（要約：訳者）

I

私たちは今まさに、経済的悲観論のひどい発作に苦しんでいる。19 世紀を特徴づけた、すさまじい経済進歩の時代は終わったとか、生活水準の急激な改善は鈍化する（少なくともイギリスでは）とか、今後の数十年で生活水準は、向上するよりは低下する見込みが高いとかいうのを、よく耳にするようになった。

私は、これがいま起きていることについての解釈としてはまるっきりまちがっていると思う。私たちが苦しんでいるのは、古い時代のリューマチからではなく、あまりに急速すぎる変化の成長の痛みであり、ある経済時代から次の経済時代への調整の痛みに苦しんでいるのだ。技術効率増大は、労働力吸収の問題に私たちが対処する以上の速度で進んでいる。生活水準の改善はちょっと急激すぎた。世界の銀行や金融システムは、均衡に必要な急速な金利低下を阻んできた。そしてそれですら、そこから生じる無駄と混乱は、国民所得の 7.5 パーセント以上には関連しない。私たちはまごまごしているうちに、一ポンドあたり一シリング 6 ペンス[*1]を

[*] 著作権消滅 Project Gutenberg の文を使用 http://www.gutenberg.ca/ebooks/keynes-essaysinpersuasion/keynes-essaysinpersuasion-00-h.html#Economic_Possibilities

[†] ©2015 山形浩生 クリエイティブコモンズライセンス 表示 4.0 (http://creativecommons.org/licenses/by/4.0/) 禁有断転載、有断複製。

[*1] 訳注：これは旧時代のポンド。一ポンドは 240 ペンスで、一シリング 12 ペンスなので、一シリング 6 ペンスというのは 18 ペンス、つまり一ポンドの 7.5 パーセントになる。

無駄にしているので、もっときっちりしていれば一ポンドを手に入れられたはずなのに、18 シリング 6 ペンスしか手元にないわけだ。それでも、18 シリング 6 ペンスというのは、五、六年前の一ポンドの価値に相当する。私たちは、1929 年にイギリス工業の物理生産高が空前の水準だったことを忘れている。そして輸入品の代金をすべて支払った後で新規外国投資に使える対外収支の黒字が、去年は他のどの国よりも高かったことを忘れている。アメリカと比べても、それは五割高かったのだ。あるいは—比較で言うなら—もしイギリスが賃金水準を半分にして、国の債務の八割を返済拒否し、そこから生じた余剰分を 6 パーセント以上の金利で貸し出すこともせずに何も生み出さない黄金に変えてため込んだら、いまや人もうらやむフランスと似たような状況になっているはずだ。だがそれはいまよりもよい状態なのだろうか？

いま広がる世界恐慌、何もかも欠乏している世界における失業というすさまじい異常、私たちのしでかした悲惨なまちがいは、水面下で起こっていることや、物事のトレンドに関する真の解釈を見えなくしてしまた。というのも私は、いま世界で実に多くの雑音を奏でている、正反対の悲観論の誤り二つが、私たちの存命中にまちがっていると証明されるだろうと予想するからだ。その悲観論とは、物事はあまりにひどいので、暴力的な変化以外に私たちを救えるものはない、という革命派の悲観論であり、もう一つは私たちの経済社会生活のバランスがあまりに危ういものなので、どんな実験のリスクだろうと犯してはいけないという反動主義者の悲観論だ。

でもこの小論での私の狙いは、現在や近未来を検討することではなく、短期的な視野による恥を逃れて未来に向けての翼を広げることだ。百年先の経済生活水準について、何がまともに期待できるだろうか？ 孫たちの経済的な可能性とは何だろうか？

記録のある最初期—たとえばキリスト以前 2000 年から、18 世紀の初めまで、地球の文明化された各種中心地に住む平均的名人物にとって、生活水準は大して変わらなかった。上がり下がりはもちろんあった。疫病、飢餓、戦争も来襲した。その間には黄金期がやってきた。だが段階的で激しい変化はなし。紀元 1700 年までの 4 千年間に、一部の時期は他より 50 パーセントよかったかもしれない—最大でも百パーセントよかった程度だ。

この緩慢な進歩の速度、というか進歩の欠如には、二つの理由がある。一つは重要な技術進歩が驚くほどなかったということ、もう一つは資本が蓄積しなかったということだ。

前史時代から比較的現代に到るまで重要な技術発明がなかったというのは、本当に驚くべきことだ。現代の開始にあたり、世界が保有していたもののなかで本当に重要なものは、ほとんどすべて歴史の黎明期からすでに人類に知られていたのだ。言語、火、今日と同じ家畜、小麦、大麦、ブドウとオリーブ、鋤、車輪、オール、帆、革、リネンと布、レンガや壺、黄金と銀、銅、スズ、鉛—そしてこの一覧に、紀元前 1000 年以前に鉄が加わった—銀行、国家、数学、天文学、宗教。人類が初めてこうしたものを所有するようになったときの記録はない。

有史以前のどこかの時代には—最後の氷河期以前の快適な間氷期のどこかだったかもしれない—今日の私たちが暮らす時代に比肩する、進歩と発明の時代があったはずだ。だが有史以来ずっと、それに類するものはまったくなかった。

現代が始まったのは、私が思うに、16 世紀に始まった資本の蓄積による。私の考えでは—その理由について述べることでここでの議論に負担をかけるつもりなないが—これは最初は物価上昇により生じ、それによる利潤が、新世界から旧世界にスペインのもたらした黄金と銀の財宝により実現したのだろう。その時代から今日に到るまで、それまで何世代にもわたり眠っていたとおぼしき複利計算による蓄積の力が復活し、その力を刷新させた。そして二百年にわたる複利計算の力は、想像もおぼつかないほどのものなのだ。

その例示として、私が試算したある数字をお示ししよう。大英帝国の今日における外交投資総価値は、40 億

ポンドほどとされる。これが私たちに、6.5 パーセントほどの収益率で収入をもたらす。このうち半分を私たちは故国に持ち帰って享受する。残り半分、つまり 3.25 パーセントは、外国に残して複利計算で蓄積させる。これに類する活動が、いまや 250 年ほど続いている。

というのも、イギリスの外国投資の始まりを、私はドレーク提督が 1580 年にスペインから盗んだ財宝にまで遡るものとしているからだ。その年、ドレークは私掠船ゴールデンハインド号の莫大な獲物を持ち帰った。エリザベス女王はこの遠征の資金提供をしたシンジケートの大株主だった。その取り分の中から、女王はイギリスの対外債務を全額返し、財政を均衡させ、それでも手元に 4 万ポンド残した。彼女はそれをレヴァント社に投資した—これが大繁盛。レヴァント社の利潤から東インド会社が創設された。そしてこの巨大事業の利潤が、その後のイギリス外国投資の基盤となった。さて、たまたまではあるが、4 万ポンドを 3.25 パーセント複利で蓄積させると、各種年代におけるイギリス外国投資の実際の量とだいたい一致するし、今日ならそれは 40 億ポンドになるが、これはまさに現在の外国投資額だ。だからドレークが 1580 年に持ち帰った一ポンドは、いまやすべて 10 万ポンドになった。これぞ複利計算の威力！

16 世紀から、18 世紀以降は累積的なクレッシェンドを見せつつ、科学と技術発明の大いなる時代が始まり、これが 19 世紀初頭から怒涛のように続いている—石炭、上記、石油、鋼鉄、ゴム、綿、化学産業、自動機械や大量生産手法、無線、印刷、ニュートン、ダーウィン、アインシュタイン、その他何千もの、有名すぎ、お馴染みすぎるために一覧にできない物や人が登場してきた。

その結果は？ 世界人口はすさまじく増加し、その人々に家や機械を装備させることが必要だったにもかかわらず、ヨーロッパとアメリカの平均生活水準は、たぶん 4 倍くらいに引き上げられたと思う。資本の成長は、これまでのどの時代に見られたものであれ、百倍をはるかに上回る。そして今後は、人口増大はこれまでほどは予想せずにすむかもしれない。

もし資本が、たとえば年 2 パーセントで増えれば、世界の資本装備は 20 年で五割増しとなり、百年で 7.5 倍となる。これを物理的な物—住宅、交通輸送など—で考えて見てほしい。

同時に製造業と輸送での技術改良は、過去十年にわたりいまだ歴史上で例を見ない速度で進んでいる。アメリカでの 1 人当たり工場生産量は、1919 年と比べて 1925 年は 4 割増しだった。ヨーロッパでは、一時的な障害に足を引っ張られているが、それでも技術的な効率性は年率一パーセント以上の複利で増えているのは間違いない。これまでは主に製造業に影響してきた革命的な技術変化が、間もなく農業にも攻め込むという証拠がある。鉱業、製造業、輸送ですでに起こったのと同じくらい大規模な効率性改善が、食品生産でも見られる寸前なのかもしれない。ごく数年で—つまり私たちの存命中にという意味だが—農業、鉱業、製造業のあらゆる作業を、これまで慣れ親しんできた人間労働の 4 分の 1 でこなせるようになるかもしれない。

今現在は、こうした変化が急速であること自体が私たちに害を与え、解決困難な問題をもたらしている。進歩の最前線にいない国は相対的に苦しんでいる。私たちは新しい病気にかかっており、読者の一部はその名を聞いたことがないかもしれないが、今後の数年でやたらに耳にするようになるだろう—つまり、技術失業という病だ。これはつまり、労働の使用を節約する手段の発見が、その労働の新しい使途を見つけるよりも速く起こるために生じる失業ということだ。

だがこれは、調整不良の一時的な段階でしかない。長期的にはこれは、人類が自らの経済問題を解決しつつあるというだけのことでしかない。私は、先進国の生活水準は百年後には、現在の 4 倍から 8 倍も高くなっていると予言する。現在の知識に照らしてさえ、これはまったく驚く必要のないことだ。それよりさらに大きな進歩の可能性を考えないほうが愚かだろう。

II

議論のため、仮に百年後、私たちみんなが平均で、経済的な意味で今日よりも八倍豊かになっているとしよう。まちがいなくこれ自体は何一つ驚くべきことではない。

さて人間のニーズは充たしがたいように見えるというのは事実だ。だがそれは二種類に分かれる—他の人間たちの状況がどうあれ自分たちが感じるという意味で絶対的なニーズ、そしてそのニーズを充たすことが同輩たちよりも自分を上の立場にしたり、かれらより優れていると思わせてくれるときにだけ感じるという意味で相対的なニーズだ。二番目の種類のニーズ、優越感の欲望を満たすようなニーズは、確かに充たし難いかも知れない。というのも一般水準が上がれば、かれらもその分上がるからだ。だがこれは絶対ニーズのほうには当てはまらない—こうしたニーズが充たされる、つまりそれ以上のエネルギーを非経済的な目的のために費やしたいと思うようになる時点がやがてやってくるし、それも私たちだれもが気がついているよりずっと早めにそれが実現するかもしれない。

さていよいよ私の結論だが、それは考えれば考えるほど、みなさんの想像力にとって驚愕すべきものとなってくると思う。

私が導く結論は、大きな戦争や人口の極度の増加がないとすれば、経済問題は百年以内に解決するか、少なくとも解決が視野に入ってくる、というものだ。これはつまり、経済問題は—将来を見通せば—人類の永遠の問題ではないということだ。

これがなぜそんなに驚愕すべきなのか、とお尋ねだろうか。それが驚愕すべきなのは—将来を見る代わりに過去を見れば—経済問題、生存のための闘争は、これまでは人類にとって常に第一の、最も火急の問題だったからだ—人類に限らず、最も原始的な生命形態の開始以来、生物界すべてにこれは当てはまる。

だから私たちは明示的に、自然によって—そのあらゆる衝動と最も深い本能を通じて—経済問題を解決するという目的のために進化させられてきた。経済問題が解決したら、人類はその伝統的な目的を奪われてしまう。

これはよいことか？ もし人生の真の価値を少しでも信じているなら、この見通しは利益の可能性くらいは開いてくれる。でも私は、一般人の習慣と本能の再調整を考えるとゾッとしてしまう。そうした本能は無数の世代を通じて人々の中に養われてきたものなのに、それを数十年で捨てろと言われるのだから。

今日の用語を使うなら—私たちは全般的な「ノイローゼ」を予想すべきなのだろうか？ 私の指摘が少し実地に起きているところもある—イギリスやアメリカの富裕階級の主婦の間では、すでにかなり一般的となっているノイローゼだ。その多くは可哀想な女性で、豊かさのおかげで、伝統的な作業や仕事を奪われてしまっている—経済的必要性という拍車がないと、料理も掃除も裁縫も十分おもしろいとは思えないのに、それ以上面白いものをまるで見つけられないのだ。

日々のパンのために苦労する者は、余暇を甘きものとして渇望する—実際にそれを手にするまでは。

老掃除婦が自らのために書いた伝統的な墓碑銘がある。

> 友よ、悼まないで、決してあたしのために泣かないで
> というのもあたしはこれから永遠にひたすら何もしないのだから

それが彼女の天国だった。余暇を心待ちにする他の人々同様、彼女も聴いているだけで時間を過ごせたらどんなにいいだろうと思っている—というのもその詩の中にはもう一つこんな対句があるからだ。

> 天国は詩篇や甘い音楽で充ち満ちている

でもあたしは歌う側には一切まわらない

だが、人生が耐えられるものとなるのは、その歌う側にまわる人々だけなのだ—そして歌える人はいかに少ないことか！

つまり創造以来初めて、人類は己の本物の、永続的な問題に直面する—目先の経済的懸念からの自由をどう使うか、科学と複利計算が勝ち取ってくれた余暇を、賢明にまっとうで立派に生きるためにどう埋めるか。

精力的でやる気に満ちたお金儲け屋たちは、私たちみんなを伴い、経済的過剰の膝へと導いてくれるかもしれない。だが、過剰の到来でそれを享受できるのは、人生のそのものの秘訣を生かし続けてそれをさらなる完成へと育める人々であり、自分自身の生活手段のために売り渡さない人々なのだ。

でも余暇と過多の時代をゾッとせずに待望できる国や人々は、たぶん一つもないと思う。というのも私たちはあまりに長きにわたり、頑張るべきで楽しむべきではないと訓練されてきてしまったからだ。特別な才能もない一般人にとって、没頭できるものを見つけるというのはおっかない問題となる。特にその人が、もはや伝統社会の土壌や習俗や愛されている慣習に何らルーツを持っていないのであればなおさらだ。世界のどの部分でも、富裕層の行動と達成ぶりから判断するに、先行きは実に暗澹たるものだ！ というのもこうした人々は、いわば私たちの前衛なのだから—残りの私たちのために、約束の地を偵察してキャンプを張っている人々なのだ。かれら—独立所得を持ちながら、何のつながりも義務もしがらみもない人々—のほとんどは、直面した問題の解決にあたり惨憺たる失敗に終わっているように思えるのだ。

もう少し経験を積めば、私たちも自然の新たに見つけた獲物を、今日の金持ちたちとはまったくちがった形で使うようになるだろうし、金持ちとはちがった人生計画を描き出すようになるはずだとは確信している。

今後長きにわたり、私たちの内なる古きアダムはあまりに強いため、みんな満足するためには何かしら働かねばならない。今日の金持ちに見られるよりも自分自身のためにあれこれやるだろう。つまらない作業や決まり切った仕事があるだけでもありがたく思うだろう。だがこれ以外に、私たちはパンにバターをもっと薄く塗ろうと試みるはずだ—多少なりとも残っている、やるべき仕事をできるだけ広く共有しようとするだろう。一日 3 時間労働や週 15 時間労働にすれば、この問題をかなり長いこと先送りできる。というのも、一日 3 時間も働けばほとんどの人の内なるアダムは満足するからだ！

他の面でも到来を覚悟すべき変化がある。富の蓄積が最早あまり社会的重要性を持たなくなると、道徳律にも大きな変化が生じる。二百年にもわたり私たちを悩ませてきた多くのインチキ道徳原理、最も忌まわしい人間の性質を最も高い美徳の地位に担ぎ上げるのに使ったインチキ道徳の多くを捨て去れるようになるのだ。金銭動機をその真の価値という点から敢えて評価できるようになる。所有物としての金銭に対する愛—人生の享受と現実の手段としての金銭を愛するのとは別だ—の化けの皮は剥がれ、いささか嫌悪すべき病的状態であり、犯罪もどき、精神病もどきの傾向として、身震いしつつ精神病の専門家に引き渡すようなものだと認識されることになる。現在では富の分配や経済報酬と罰則の分配に影響する各種の社会習慣や経済慣行が、資本蓄積の促進にきわめて便利だというだけで、それ自体としてはいかに忌まわしく不公正であろうとも、あらゆる犠牲を払って維持されている。しかし私たちはついに、そうしたものを捨て去れるだろう。

もちろん、強い充たされぬ目的意識をもって、富を盲目的に追求する人はまだたくさん残るだろう—何かそれに変わるもっともらしい代替物が見つからない限り。でもそれ以外の人々はもはや、それをほめそやして奨励するような義務を一切負わなくなる。というのも、私たちは今日安全であるよりもっと興味を持って、自然が大なり小なり私たちのほとんどに与えてくれた、この「目的意識」の真の性質を検討するようになるはずだからだ。というのも目的意識とはつまり、私たちが自分の行動について、それ自体の性質や、それが周辺環境に対して持つ直接的な影響よりも、はるか将来における結果のほうを重視しているということだからだ。「目

的意識のある」人物は、常に自分の行動についての利害を時間の中で先送りにすることで、その行動の見せかけだけの妄想めいた不死性を確保しようとしている。自分の猫を愛しているのではなく、その猫の子猫たちを愛している。いや実はその子ネコたちでもなく、その子猫の子猫を愛している、という具合に永遠にその猫家系の果てまで続く。この人物にとって、ジャムがジャムであるのは、それが決して今日のジャムではなく明日にジャムがもらえる場合だけなのだ。こうしてジャムを常に未来へと押しやることで、この人物は自分の行動について不死性を沸き立たせようと苦闘する。

『シルヴィーとブルーノ』に出てくる教授を思い出していただこう。

> 「ただの仕立て屋でございやすよ、請求書をお持ちいたしました」とドアの外で弱々しい声がした。
>
> 教授は子供たちに申しました。「おやそうか、あいつの話ならすぐに片がつく。ちょっと待って戴ければね。今年はおいくらかね？」仕立て屋は、教授が喋っている間に中に入ってきたのでした。
>
> 仕立て屋は、ちょっと粗野な調子で申しました。「ええ、もう長いこと倍増しつづけてきましたんで、いまお支払いいただきたいなと思いやす。二千ポンドになります！」
>
> 「なんだ、それっぽっちか！」と教授は平然と申しまして、ポケットの中を探り、まるでいつもその程度の金額は持ち歩いているとでも言わんばかりでした。「でもあと一年だけ待って、それを四千ポンドにしたいとは思わないかね？ どんなに金持ちになれるか、考えてもごらん！ お望みならば王様にだってなれるかもしれないよ！」
>
> 仕立て屋は思慮深げに申しました。「王様になんかなりたいかどうかはわかりませんが。でも確かにお金の強力な光景が目に浮かびますぜ！ では待つとしましょうか—」
>
> 「もちろんそうだろうとも！ なかなかの知恵をお持ちとお見受けした。ではごきげんよう！」
>
> 「いつかあの四千ポンドを払わなきゃいけないことになったりしないの？」と帰る債権者の背後でドアが閉じるとシルヴィーは尋ねました。
>
> 「お嬢さん、まさか！」と教授は熱烈に答えます。「あの御仁は死ぬまで倍々し続けるだけ。というのも、お金が倍になるならいつだってもう一年待つ価値があるのですよ！」

ひょっとして、私たちの宗教の核心と本質に不死性の約束を持ち込むのに最も貢献した人種が、複利原理に最も貢献し、最も目的意識の高いこの人間制度をことさら愛しているというのは偶然ではないのかもしれない。

だから私は、宗教や伝統的美徳の中で最も確実で確固たるものにみんな戻っていいのだと思う—つまり貪欲は悪徳であり、高利の収奪は不品行であり、金銭愛（守銭奴）は軽蔑すべきもので、最も着実に美徳と正気の叡智の道を歩く者は、未来のことを最も考慮しいものだ、という美徳だ。私たちは再び手段より目的を重視するようになり、便利なものより善良なものを好むようになる。今の時間、今日という日を美徳を持って立派に活用する方法を教えてくれる人々を尊ぶようになる。物事の直接の楽しみを見いだせる素晴らしい人々、働きもつむぎもしない、野の百合のような人々が尊敬されるのだ。

だがご注意を！ こうしたものすべての時はまだ満ちていない。少なくともあと 100 年にわたり、私たちは自分たちや他の番人に対し、きれいはきたなくきたないはきれいだというふりをしなければならない。というのもきたないは便利で、きれいは役に立たないからだ。貪欲と高利貸しと用心が、もうしばらくは私たちの神であり続ける。それらだけが、経済的必要性のトンネルから太陽の下へと私たちを導けるのだから。

だからそう遠くない日々に、人類全体の暮らす物質環境に空前の大変化が起こることを、私は心待ちにしている。でももちろん、これは大災厄としてではなく、だんだん起こることだ。実際、すでに始まっている。物事の筋道としては、経済的必要性の問題が実際問題として取り除かれた人々の階級や集団がますます大きくな

る、というだけのものだ。この条件があまりに一般的になりすぎて、身の回りの人々に対する私たちの責務の性質が変わってきたときに、決定的なちがいが実現する。というのも、自分にとっては高い目的意識が納得できるものではなくなった後でも、他人のためには経済的に目的意識を持つほうが適切であり続けるからだ。

経済的至福という目的地に到達する速度は、四つのもので決まってくる—人口を抑える力、戦争や内紛を避ける決意、明らかに科学の問題である物事については科学に任せようという意志、生産と消費との差として決まる蓄積率。このうち最後のものは、他の三つさえそろえば自然に実現する。

一方、自分たちの運命に対し、少しばかり準備をしておいても罰は当たるまい。つまり目的ある活動だけでなく、人生の秘訣を奨励し、いろいろ試してみるということだ。

だが何より、経済問題の重要性をあまり過大に考えたり、その必要性と称するもののために、もっと重要でもっと永続的な重要性を持つ事柄を犠牲にしてはならない。経済問題など、専門家のやるべき仕事となるはずだ—歯医者のように。もし経済学者たちが、歯医者並に謙虚で有能な人々だと思われるのに成功すれば、実にすばらしいことではないか！